金持ちと鶏

小川未明

青空文庫

あるところに金持ちがありまして、毎日退屈なものですから、鶏でも飼って、新鮮な卵を産ましして食べようと思いました。

鳥屋へいって、よく卵を産む鶏を欲しいのだが、あるか、と聞きました。

鳥屋の主人は、

「よく卵を産む鶏なら、そこのかごの中に入っていますのより、たくさん産む鶏はありません。」といいました。

金持ちは、かごの中に入っている鶏を見ました。それは、背の低い、ごま色の二羽の雌鶏と、一羽のあまり品のよくない雄鶏でありました。

「これがそんなに卵を産むのか。」と、金持ちは問い返しました。

「産むにも、それほど産む鶏は、おそらくありません。」と、鳥屋の主人は答えました。

金持ちは、その三羽の鶏を買って家に帰りました。

なるほど、日数がたつにつれて、雌鳥は毎日卵を産みはじめました。一日とて休みなく産んだのであります。金持ちは、毎日新鮮な卵を食べられるので喜びました。

「買う時分には高いと思ったが、こう、毎日卵を産むんでは、ほんとうに安いものであった。こんないい鶏というものは、めったにあるもんでない。」と、独りで自慢をしていました。

ある日のことでありました。金持ちの友だちが遊びにきました。金持ちは友だちに向かって、

「家の鶏は、ほんとうに珍しい鶏で、毎日いい卵を産む。まあ、あんな鶏はめったにないものだ。」と、自分の鶏をたいそうほめていいました。

友だちは、日ごろから、やはり鶏が好きであったものですから、

「ほう、おまえさんも、このごろは鶏を飼いはじめなさったか。どれ、どれ、どんな鶏だかひとつ見せてもらおう。」といって、さっそく、裏に出て、その鳥をながめました。

金持ちは、そのそばにやってきて、

「どうだい、珍しい鶏だろう。」といいました。

友だちは、黙って、その鶏を見ていましたが、やがて大きな口を開けて笑い出しました。

「おまえさんは、まだ鶏にはまったくの盲目じゃ、この鶏などは、ざらに世間にある鶏で、珍しい鶏でもなんでもない。」といいました。

それから、友だちは、自分の養鶏によって経験をした、いろいろなことを語って金持ちに聞かせましたので、金持ちは、自慢したのが恥ずかしくなりました。

友だちが、帰りました後で、金持ちは、なんだか悔しくてなりませんでした。日ごろから負けずぎらいな男でありましたから、どうかして、そのうち友だちを驚かしてやりたいものだと思いました。

いままでのように、金持ちは、卵を産む鶏をたいせつにしなくなりました。どうかして、こんなありふれた鶏をどこかへやって、珍しい鶏をほしいものだと思いました。

ある日のこと、金持ちはふたたび町の鳥屋にやってきました。

「鳥屋さん、どうか私に珍しい鶏を売ってくれないか。この前、この店で買って帰った鶏はありふれた鶏で、珍しくもなんともない。」といいました。

すると、鳥屋の主人は、

「この前いらしたときには、卵をたくさん産む鶏が欲しいとの仰せでしたから、卵を産む鶏をさしあげたのです。いかがですか、卵を産みましたか。」と聞きました。すると、金持ちは顔をしかめて、

「産むにもなんにも、毎日うるさいほど産む。卵ばかり食っていられるもんでなし。」と、かえって不平をいいましたので、さすがの鳥屋の主人もたまげてしまいました。

「よろしゅうございます。そこの金網を張ったかごの中にいる鶏は珍しい鶏です。おそらく、こんな鶏をこの近在に持っている人はありません。強いことはこのうえなしです。かごから外に出すときは、脚になわをつけておかないと、空を飛んで、逃げてゆきます。これは対馬からきましたので、野生の鶏でございます。」といいました。

金持ちは話を聞いただけで、はやびっくりしました。そして、金網を張ったかごの中をのぞきますと、なるほど、首の長くて赤い、背の高い、けづめの鋭くとがった雄鶏と、一羽のそれよりやや体の小さい雌鶏がいました。

「鳥屋さん、ほんとうに珍しい鶏だね。」と、金持ちは喜びに喜びながら問いました。友だち

に見せて、ひとつ驚かしてやろうと思ったからです。

「へい、へい、お珍しいということにかけては、どこへ出したって恥ずかしいことはありません。」と、鳥屋の主人は答えました。

金持ちは、この鶏をかごごと買って帰りました。明くる日、さっそく、友だちのもとへ使いをやって、世に珍しい鶏を手に入れたから、ぜひ、見にきてくれと告げました。

鶏好きの友だちは、どんな鶏を金持ちが買ったろうと思って、すぐにやってきました。

「珍しい鶏をお求めなさったというが、どれひとつ見せていただこう。」と、友だちは、金網を張ったかごの前に立って、内をのぞきました。

「なるほど、変わった鶏だな。」と、感嘆をしてながめていました。

そばに立っていた金持ちは、得意の顔つきをして鼻をうごめかしていました。

「この鶏は、空を飛ぶばかりでなく、強くてどんな鶏にもけっして負けたことがない。」と、金持ちがいいました。

友だちは、金持ちの顔を見上げて、

「空を飛ぶとな、そんな鶏が世の中にありますかえ、それはすこしおおげさすぎはしないか。」と、頭をかしげました。

「だれがうそをいうもんか。ひとつ飛ばしてみせよう。」

と、金持ちはいって、大騒ぎをして、鶏の脚に縄を結び付けて、外に出して放しました。

すると、たちまち羽ばたきをして、鶏は屋根の上を飛び、木の枝に止まりました。

友だちは、これを見て呆気にとられると、金持ちはますます得意になって、

「このとおりだ。闘鶏をさせるなら、どこからでも相手になるのを連れてくるがいい、けっして、この鶏は負けないから。」

と、金持ちはいいました。

友だちは、考えていましたが、

「じつは、私のところに強い闘鶏が一羽いる。かつて負けたことがないのだから、ひとつおまえさんのこの鶏と闘わしてみましょう。」

といいました。

「それはおもしろいことだ。」と、金持ちは答えました。

明くる日、友だちは闘鶏をつれてきました。そして、金持ちの鶏と闘わしました。

はじめのうちはどちらが勝つか、負けるかわからないほどでありましたが、ついに金持ちの鶏に友だちの闘鶏は負かされて、血だらけになってたおれてしまいました。

それからというもの、金持ちの得意は一通りでありませんでした。近所でも、この鶏は評判になりました。

小学校の生徒や、小さな犬は、この鶏をおそれてそばに寄りつきませんでした。

金持ちは、鶏が家に慣れると、つねにかごから外に放しておきました。夜になると鶏は、家

に帰ってきてかごの中に入りました。

近所の人々は、鶏のために圃や、庭を荒らされるのを苦に思いましたけれど、家や、地所が金持ちの所有であるために、なにもいわずに忍んでいました。

秋の日のこと、この村を洋服を着て、銃を肩にした男が、猟犬をつれて通りました。日ごろ怖ろしいもの知らずの金持ちの鶏は、犬に向かって不意に飛びつきましたので、犬は怒りました。そうして、とうとう犬のためにかみ殺されてしまいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　1」講談社
1976（昭和51）年11月10日第1刷
1977（昭和52）年C第3刷
初出：「こども雑誌」
1919（大正8）年10月
※表題は底本では、「金持《かねも》ちと鶏《にわとり》」となっています。
※初出時の表題は「金持と鶏」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：江村秀之
2013年9月23日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金持ちと鶏

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/